

暮れも押し詰まりました。さて、今月見た映画作品の中から3本の作品を取り上げてみましょう。イラン出身の映画監督ジャファル・パナヒの作品から。結果的にイランつながりです、今回は。

■ ジャファル・パナヒ『ある女優の不在』(2018)

ジャファル・パナヒは1960年生まれ、イラン出身でテヘランで映画制作を学び、『友だちのうちはどこ?』(1987)『桜桃の味』(1997)と言った名作を送り出した、イランを代表する映画監督アッバス・キアロスタミ(1940-2016)の下で助監督を務め、1995年監督デヴェウシこれまで11本の作品を発表し、最新の作品は『熊はいない』(2020)でした。Netflixのスターシステム作品2本をみた後では、何と心に響く作品であることか、好みからすれば断然ジャファル・パナヒを支持したくなってしまう。冒頭のショッキングなスマホ映像(ある若い女性の自殺を撮ったもの)の後の車中での長回しは10分近くか、それ以上ありこの時点で一気に作品に惹きつけられてしまいます。この自殺を撮った映像を送られた女優ベーナズ・ジャファリは、撮影をほっぽいて事の真相を追求するためカメラマンを引き連れ、イランの随分田舎の村に向かいます。このカメラマンを演じるのはジャファル・パナヒ自身です。一見、若松孝二にそっくりなのに驚きますが。(そのキャラクターは若松孝二とはまったく正反対です)この村は、アゼルバイジャン語圏でイラン語は通じません。イランの人口は9280万人でアゼルバイジャン語を話すのはそのうち1500万人以上とされ、彼らはイランでは最大の少数民族ということになります。真相追求の只中で、村人たちの社会の様子が実にリアリスティックに描かれます。それは、黒澤明の『七人の侍』(1954)における菊千代(三船敏郎)による農民評に酷似しています。したたか本心を明かさず、腹の中では猛烈な外部の人間に対する拒否反応を示す閉鎖的でウルトラ・エゴの世界です。その環境の中で、ジャファル・パナヒは冷静に状況を見極める冷めた視線を貫きます。真相の解明が出来、女優ベーナズ・ジャファリとジャファル・パナヒは複雑な想いを新たにします。これは、善悪の価値基準とは異なる社会構造のありのままの姿です。イランという国を考えると嘆息せずにはいられません。『熊はいない』同様に強いインパクトを持つ問題提起のメッセージ性を持つ優れた作品です。

■ ジャファル・パナヒ『人生タクシー』(2015)

この作品もジャファル・パナヒ監督作品です。原題は『Taxi』で、タクシー映画といえばマーティン・スコセッシンの『タクシードライバー』(1976)やジム・ジャームッシュの『ナイト・オン・ザ・プラネット』(1999)やはたまた日本映画では谷口千吉監督(脚本は黒澤明と谷口千吉の共作)の三船敏郎がタクシードライバーに扮する『吹けよ春風』(1953)を筆者は思い浮かべ、『パリ・タクシー』(2022 クリスチャン・カリオン監督)は忘れてしまいたいと思っている作品ですね。(山田洋次が同じ原作で『TOKYOタクシー』を完成したと聞いたときには二の句が継げませんでした)本作は、ジャファル・パナヒ監督自身がタクシー運転手に扮し、テヘランの街中を走り、その風俗をリアリスティックに描きます。ドキュメンタリー風とでも言いましょうか、こうしたスタイルで撮らなければイラン国内の上映は不可能だったと言います。(結果的には本作はイランでの上映ができませんでした)国内情勢を公にすること自体がタブーな世界なのです。様々な市民がタクシーの乗客として登場します。テヘランのタクシーは基本的に乗合の形式を取るようで、単独で乗りたい場合にはその旨予めドライバーに伝えるようです。本作を見ると、如何にテヘランでの生活、特に映画全般に携わる人々にとって表現の自由が制限され、言論の自由が抑圧されて状況の酷さが判ります。劇中に登場する薔薇の花束を手にした女優は、ドライバーであるジャファル・パナヒに不満の程を発散しますが、その言葉は重くのしかかります。また、ジャファル・パナヒの姪っ子が登場しますが、この幼い子どもにも社会体制に対する不満を発言させるところは、ジャファル・パナヒにとって苦肉の策とも言える手法に思えます。劇中の「中国の次に(イランは)死刑囚が多い」という言葉も国の姿を浮き彫りにします。ラストに出てくる車上荒らしは、まさに「今そこにある危機」でしょう。ここでもジャファル・パナヒの独特の長回しは実に効果的です。社内の固定カメラ、それに姪っ子の手持ちのカメラが効果を十全に発揮します。ここでは、ジャファル・パナヒの余裕のあるような映画作りへのスタンスのみが救いに思えてきます。

■ ババク・ジャラリ『フォーチュンクッキー』(2023)

先週の号で見逃してしまった作品として挙げたものですが、見ることができました。原題の『Fremont』はサンフランシスコ南東岸にある都市で、人口23万人程度の規模。本作では、その一隅にある主に移民の生活するアパートメントとチャイナタウンと思しきところにあるクッキー工場が主な舞台です。アフガニスタンでアメリカ軍の通訳経験のある若い女性はアメリカに移住し、このクッキー工場で働いています。こうした単純労働の提供しかないのですね、アフガニスタン移民の場合は。彼

女には家族を置いたまま移住した負目と戦場で殺害された同僚通訳のことも心に残る傷となり不眠に悩まされます。彼女を取り巻く人々の描写は淡々としていながら、社会の中のマイノリティ、中流以下のランクの人たちの生き方・生活を丁寧に描き、なぜか筆者には「佇まい」という言葉を想起させます。不満はあるものの、それを口に出すこともなく悶々としながらも、じっと耐え、何らかのほんの少しの息抜きを求めながら日々の生活を送っていくという健気さを感じるからでしょうか。彼女には、アフガニスタンに比べればまだ安全と言えるアメリカでの幸せを掴み取ってもらいたいと思ってしまいます。アメリカへの移民の先駆者的な中国人（本作では深圳出身で広東語を話すクッキー工場の経営者が登場）の独特の文化表現も見られます。ゴールドラッシュの時代から移民としてアメリカに根を張ってきた中国系の人々は、今やアメリカの主要な都市にどこでもチャイナタウンを形成し、社会的経済的確固たる地盤を完成させています。そのしたたかさと厚顔無恥な生き様こそが、まさにパワーの根底にあります。

さて、本作を監督したのは、イラン出身のババク・ジャラリ。この人もイランの人ですね。生年不明で、ロンドンで映画を学んだ経歴があるようです。（ロンドン・フィルム・スクール）こうしたインディペンデント系の作品の中には、玉石混淆の状態です。秀作が混じっているものも。本作のような映画作家としての独自の作風と個性を感じる人材が出現することは嬉しすぎです。イランの映画作家が自国で何も気にせず映画を制作することは、現時点では不可能なことです。何ともできない状態に歯噛みする思いです。